

キリスト教から読む大野一雄

——「魚釣り」としての人間

柳澤田実

0 はじめに

大野一雄は「舞踏」について語る際に、魚や馬など、生き物の比喩を好んで用いる。本稿は、この生き物たちの比喩に注目し、その比喩的イメージのなかに「舞踏」とキリスト教の類似性を解説しようという試みである。とはいえ、筆者は、これらの生き物の比喩の起源を、キリスト教のシンボリズムや聖書等に探り出そうと考えているわけではない。大野一雄が、一九三〇年、自身が二十四歳の時に洗礼を受け、作品においても、またインタビュ어나テキストなどにおいても、キリスト教の様々なモチーフについて言及してきたことはよく知られている。しかし、筆者が先に述べた生物の比喩に見出すのは、キリスト

教から大野への表層的な影響ではなく、これらの比喩に賭けられた、「舞踏」とキリスト教が共有するある人間理解についてである。

「舞踏」とキリスト教は、ある人間理解を共有している。このような仮説から出発した際に、両者を結びつける共通点として想定されるのが、いわゆるロゴス・理性を中心とした近代的人間観に対する批判である。大野一雄や土方巽が、「舞踏」を創始した際に、形式フォルムを基盤とする西洋式のモダンダンスに自らの実践を対置させたことは有名である。また、大野がノイエタノイエタンツを通じて直接影響を受けたドイツ表現主義は、ロマン主義の復興であったが、これは均整の取れた美や合理性をその原理とする古典主義に対する反動として生まれたものであった。ロマン主義の内実は極めて広範であるが、大野が強く影響を受け

た部分に限定するならば、それは個々人の「内面」を通じて、直接的な生の経験・生命・自然に立ち戻ることを目指す思想潮流だと総括できるだろう。こうしたロマン主義は、近代以降のキリスト教信仰とも無縁ではなかった。ここで詳細を論じ尽くすことはできないが、個人的な直接的経験への志向は、近代以降のキリスト教にも明らかに見られ、方やそれは「聖書のみ」に信仰を基礎付ける新教・プロテスタントとなり、他方でカトリックの伝統に見出される「神秘主義」となった、とひとまずは整理できるだろう。大野舞踏の重要なキーワードでもある「生命」を自らの哲学の中心に据え、「生命の飛躍」ⁱⁱをキリスト教神秘家の実践に見出したアンリ・ベルグソンの思想もまた、こうしたロマン主義的カトリシズムに含まれるだろうし、ウィリアム・ブレイクなどの作品に表わされた屈曲し、ねじれた身体には、一見したところ舞踏との類縁性が見出される。

このように「舞踏」とキリスト教を結びつける一つの結節点であるロマン主義に対しては、しかし、近代の人間観を根本的に覆す主張にはなり得ていないのではないかという批判がある。ii 確かにロマン主義は、近代の理性中心主義に対する反動である以上、その前提を根底から崩すと言うよりはむしろ強化するものだとと言えるだろう。この事実を前提に、筆者は、大野の「舞踏」がもつ近代の人間観に対するよりラディカルな批判性を、先述の生き物たちの比喩において明らかにしようと考えている。より具体的に述べるならば、こうした比喩によって語られてい

る「舞踏」を、「自らを取り巻くもの」環境」と取り結ぶ相関的な関係として析出したい。この「自らを取り巻くもの」との関わり方においてこそ、大野の「舞踏」はキリスト教と、より端的にはイエス自身と重要な態度を共有しているからである。大野を通じてイエスを発見することは、イエスを様々なドグマから離れて問いなおすことでもある。大野によって与えられた視点から福音書を再読することにより、イエスもまた「自らを取り巻くもの」と驚くべき仕方に関わった一人のパフォーマーとしてその姿を現すことになる。

1 泳ぎ出す鯉

大野が用いた生き物の比喩のなかで、最初に取上げたいのは「鯉」の比喩である。iii 大野は、この比喩を「私のからだのなかを鯉が泳いでいる」という母の遺言から得たという。このエピソードは「わたしのお母さん」の制作メモ^{iv}にも記述されているが、インタビュのほうにこそ、より興味深い表現が随所に見出される。まず、大野は、鯉が砂に埋もれ、それが余りにも長い間埋もれて、べったりと平らになってしまった状態を想定することから始める。すっきり平らになってしまった状態の鯉の目は突き出し、次の瞬間、鯉自身が泳ぎ始める。「ぱっと」起き上がる瞬間、鯉の体は「縮まり」、「地面が持ち上がり」、

砂や砂礫が「ふわーっと」舞い上がっただろう。大野はこの砂塵のなかをひらひらと泳ぎ始める蝶を、死に逝く母の状態と重ね合わせる同時に、「踊り」の比喩として理解している。大野の言葉に則すならば、海底の砂塵に埋もれる蝶のように「何万年耐えに耐えて」、「魂の出入り口である目」が突き出し、「全てのエネルギーが結集され」「ぱっと」泳ぎだす、これが「踊り」であると言うのだ。

ここで語られる蝶の長い年月のエネルギーの結集は、『ラ・アルヘンティーナ頌』（一九七七年）での再出発まで耐えに耐えた大野自身を想起させるものである。また、この蝶の比喩は具体的な作品（蝶のダンス）にもなっているのだが、こうした蝶の泳ぎ出しによって語られた「エネルギーの結集」は、全ての「踊り」において実現されるべきものではなく、更にこの蝶の比喩について、分析を続けてみたい。「耐えに耐えた」蝶は泳ぎ出すわけであるが、それは「泳ごう」という蝶の能動的な「意志」によるものではないだろう。蝶という生物には「意志」という能力がないと言いたいのではない。蝶が、人間に想定されているような意識的な「意志」を持つことはないだろうが、意志に類似した志向性を持っていても不思議ではない。重要なのは、この泳ぎ始めの端緒に、「意志」といった概念に付与されているような、何らかの能動性を想定するべきではないということである。蝶の動きを理解する上で重要なのは、この泳ぎ出しに先立つ、平らになるほどじっとしていた蝶の姿勢

であろう。地面にべったりと平らにはりついた蝶は、泳ぎ出したいという意志を、そうするのを我慢するというもう一つの意志で押さえつけていたわけではないはずだ。蝶は、おそらくはただ地面に合わせて身を横たえ、じっとしていたのである。砂にじっと埋もれていた蝶は、その同じ姿勢にまさに耐えられなくなった時、身を縮めて泳ぎ出す。すなわち、先立つ身体の動きこそが、次の動きを生み出すのである。またそのためには、蝶を取り巻く環境、砂や水も重要な役割を果たしていることだろう。蝶が平らになつていたのは、平らかな地面があり、そこに自らを埋もれさせることができる砂があったからであろうし、その姿勢に耐え切れず身を縮めた際には、その縮めた身を浮かせ、泳がせてくれる水があったことだろう。蝶は、その水を知覚しつつ自らを取り巻く水の流れに応じて身を動かしたことであろう。このように、能動的な意志のみによっては構成されない、それに先行する身体の動きと周囲の環境によって構成される「流れ」としての動きこそが、大野が理想とする「踊り」のように思われる。例えば大野は、一九九二年のインタビューにおいて、自らが踊り始めた頃を回顧し「流れのなかで」踊り始めた」と述べ、また、踊りは「構成する」のではなく、「生まれる」のでなければならぬと繰り返し強調している。

こうした意識的な意志や意図によっては構成されえない舞踏の本質は、大野も土方も強調する「生活」や「衣食住」と深く結びついている。「御殿、空を飛ぶ」の冒頭に掲げられた「衣食住

と資源論」という文章では以下のように言われている。

「天地創造から現在に至るまで、人間は環境に順応し、環境を乗り越え、これに合わせるように自分自身も変貌しながら環境をも変革し、その恩恵の中で生きてきた。宇宙記憶、生命記憶として内外両面から詳細な日記を生命に刻み込み、刻み込んで現在に至っている。魂の羽織っている肉体は宇宙を羽織っていることになる。」（『御殿、空を飛ぶ』一三頁）

「これに合わせるように自分自身をも変貌しながら環境をも変革し」という一見単純に見えるこのフレーズには、極めて重要なことが述べられている。人間は生物である限り、環境を一方的に改変するのみならず、それに合わせて自らを変容させることも同時に行ってきたというこの事実を、私たちは忘れがちである。鱗を平らにするのは、平らな地面なのであって、それに鱗は身を合わせていたはずだ。さらに身を縮めた際には、鱗は取り巻く水に自らを合わせて泳いだことであろう。この「合わせる」ということは、実際に環境と接触するなかで実現されるために、「肉体は宇宙を羽織っている」という衣服の比喩が相応しいことになる。衣が体に合わせてかたちを変えるというリアクションと同時に、体も衣に合わせて変容するというインタラククション。このインタラククションが魂と肉体の間にも見

出されるという点については次節に譲るとして、ここでは大野のこうした^{生態心理学的}エコロジカルな視点に注意を喚起しておきたい。要するに大野の考える「踊り」は、自分を取り巻くものに関わり、「合わせる」といった相互的な反応のなかで「生まれてくる」ものであり、こうした動きのヒントは、ご飯を作って食べたり、掃除をしたり、雑草をむしったりといった生活の所作の中にこそ潜在しているということである。

2 環境に対するリアクションとしての「舞踏」

意識的な意志や意図によって構成されるのではなく、環境との相互作用の中で、身体が環境に反応することによって動きが生まれるという「舞踏」の特徴を掘り下げるための一つの有効な手段が、ジェームズ・ギブソンによって創始されたアフォーダンスの理論である。ギブソンは、環境には生存に役立つ情報、すなわち「食べることができ」「立つことができる」「座ることができる」といった行為の可能性・生態的意味が潜在しており、人間を含めた生物は、その潜勢する可能性を行為によって発見すると考えた。このギブソンの理論を舞踏分析に適用した事例として小池琢也氏の岩名雅記分析がある⁵。「物と人の境界」という題名のこの論文は、無生物と生物との運動^{キネマティクス}の相違を明らかにした上で、無生物の運動が析出される「舞踏」の特

異性を論じたものである。身体を「物」無生物」として環境に投げ出すことにより、生物が環境に初めて出会ってリアクトする際の動きが生じる。この動きこそが「舞踏」という小池氏の主張は、土方と大野が創始した「舞踏」の本質を見事に言い当てている。さらに、この論稿には、小池氏、岩名氏と佐々木正人氏のディスカッションが付随しているのだが、その中で岩名氏は大野について極めて興味深い指摘をしている。

「それから次は、みんな、なんだあと言うかもしれないけど、とても大事なことは、『忘れる』ということですね。

忘れないと、意志は憶えていることによって再現を試みようとするわけです。身体は、だからそのときの生々しい動きが出なくなる。だから忘れることです。ちよつと脱線しますけど、大野一雄さんという九六歳になる大先輩の舞踏家の方がいるんですけど、この人を評して僕の大変親しい友人の合田成男さんというこれまた大長老の舞踏評論家の方が『あの人のなせいいかっていうと、呆けているからだよ』って言うんですよ。それは本当にね、そうだと思いますね。非常に優れている舞踏は、その呆けたように忘れていくということをきちんと実演者としてどこかに保存できている、しかも欲望がきちんと立ち上がってくる。欲望も少なくなつてない、ということですね。だから大野さんは忘れっぽいからいいよって合田さんは言うんです。」

この言及において興味深いのは、大野の舞踏においては、蓄積された表象を再現しようとする意志が忘却によって放棄されてもお、欲望がきちんと立ち上がってくる」と指摘されている点である。ここで岩名氏が指摘する「欲望」は、ある意味で「舞踏」を環境へのリアクションのみに還元することを限界づけるように思われる。別の言い方をすれば、この「欲望」は、「舞踏」を身体のみによって説明することを限界付け、大野の言葉で言えば「舞踏」を「魂」という位相なしには語れない所以に触れていると言えるだろう。鱈は砂地によって平らになつたが、ある瞬間に泳ぎ始めるといふ別の動きへと移行するためには「エネルギーの充溢」と言われるものがあつた。この「エネルギー」が、「生命」、「魂」の動き、「欲望」と言い換えられる。

大野が、自らが踊るに際して、この「魂」としか呼称しようのない「欲望」を大切にしていたのは間違いない。『御殿、空を飛ぶ』二二頁の「魂の羽織っている肉体は宇宙を羽織っていることになる」に続くのは、「肉体は魂と離れがたく一つのものだと思つています」であり、これもまた大野が反復する命題である。と同時に、大野は、離れがたく一つであるはずの肉体と魂の間にも、いずれかが先行するがゆえにズレが生じるといふことを認めている。このことは、踊りに関して「魂」は「身

体」に先行するべきだという主張に端的に表れている。

「……ここ数年間、私が一番心にかかっていることというのは、余り動いたつてしようがないんだということなんです。動かなくちゃならないんだけど、内的な動きだつてあるはずだから、それを詰めて、詰めて、忍耐してそういうような時には思いが先であつて、それは感情という言葉では、ちょっと言葉が足りないかもしれないけれど、フィーリングかな。私は魂と肉体は一つのものだと思つていますが、魂を命の根源として大切にします。肉体は魂についてきます。意識が先走ると危険です。本能の場合は強力です。生活を先生としていろいろ教えられております。日常生活では心と身体の動きは深く結びついています。いや、一つだと言つてもいいでしょう。自分が生きてゆくために、隣りの者との関係が重要な要素になつてくる。自分も必死になつて生きてきたし、隣の者も、必死になつて生きてきた。肉体と魂は分かちがたく一つであるという、そういう中で何億年も生きてきた。環境の中で鍛えられながらでしょう。……日常生活の中で、魂と肉体は一つであるわけです。ところが踊りをやるうとした時に、何となく分かれてしまう。一つになつてやつているつもりで肉体だけが動いていることだつてある。肉体は、肉体となり、こういうテーマがあるからこうすればいいでしょう、という

ような考えの中では、とても心と肉体が一つになつてくれない。ちよつと距離がありすぎるんですよ。そういう距離を取つ払うためにも、稽古というのは必要なんです。」
 (『御殿、空を飛ぶ』七〇―七二頁)

大野の思想が凝縮した上記のテキストには、重要な心身理解が見出される。第一に、「魂」は「意識」と同一視できない「生命の根源」であるとされる。第二に、先にも述べたように、「魂」は「身体」を先導するべきだとされている。第三に、日常の「生活」においては「魂」と「身体」の両者は一つである。第四に、「意識」によつて「魂」と「身体」に「距離」が生じるが、先の蝶の比喩に登場した「忍耐」とも似た、生活における鍛錬が両者を結び付けると言われている。第五点目として、大野は、この心身の一致を成し遂げるために「稽古」が必要だと述べている。一九九二年のテレビインタビューにおいても、上述の「魂」の先導は、さまざまな美しい事例によつて語られていた。「ああと心(＝魂)が動くから、それに導かれて足が出る」。また、浄瑠璃においては、人形がぱつと止まった時に、体が生きている人間以上に体がしなることによつて、人々はそのしなりに「魂」の動きを見出し、感動するのだと大野は言う。

以上の大野の思想を理解するためには、幾つかの注意が必要である。まず大野が述べる「心」は、デカルト以来の心身二元論における「心」(mens, mind)とは異なるものである^{vi}。すなわち、デカルト以降現代に至るまで日常的にも共有されているような、「身体」を介して外界を認識し、「身体」に命令を発信する、いわば情報が出入りする人間存在の中核としての「心」ではない。と同時に、大野は、「生命の根源」という極めてロマン主義的な抽象的な「心」理解に終始するのでもなく、心身の両者を単純に生命へと一元化するわけでもない^{vii}。彼は、「心」を「舞踏」という実践において、あくまでも「身体」との具体的な相関関係のなかで捉えようとしている。この具体性は、以下の興味深い二つの生物の比喩によって語られている。

「それがね、魚釣りが踊りの原点であると。原点と言うかね、心と動きがね、内的なものが釣り糸によって私の心がひっかかった魚とつながっている様に心の糸で動きと心が完全につながっているのが舞踏だと思っています。これは魚釣りの意図と同じである。それで幽霊なんてこともあるからね、ハゼ釣りなんて小さいけど、これで人間と同じくらしいのハゼがかかって来てさ、目と目が合ったらこれは動

転するだろう、と。しかしクジラが出て来てかかってきても別に驚かない、というような思いがあった。それで私は小学校の頃、夢中でハゼ釣りをした経験があるわけ。それでいまだに踊りつてやつはね、ただ動く人でなくして、魂でこうして踊るということになっている。そしてあらゆることがらがそこに関わってきたんです、環境から。」
(『御殿、空を飛ぶ』五四頁)

この魚釣りの比喩は、先に岩名氏が述べていた、「舞踏」における「過去の動きの表象を忘却すること」と「欲望すること」の並存についても多くのことを教示してくれるように思われる。この比喩によれば、大野は、舞台上で、魚釣りをしているのだという。その際に、釣り人は、「意識」ではなく、「心」欲望「魂」であり、その釣り人は「心の糸」で身体的な動きを吊り上げるというのだ。大野によれば、これは決して逆であってはならないということになる。さらに繰り返すが、ここで言われている「心」は決して意識的な意志や意図に還元できるものではない。なぜなら、それは意識的ではないばかりか、何らかの特定の対象に向けられた志向性ではないからである。もちろんこの「舞踏」も「魚釣り」において、一切の目的が存在しないわけではない。釣り人はあくまでも魚を釣ることを目指しており、その意味で彼は最低限の志向性は有している。大野自身の言葉にもあるように、それを意図と呼ぶのであれば、確かに意図は

存在していることにはなる。それがハゼ釣りであるならば、とりあえずハゼを釣ることが意図されてはいるだろう。しかし、どのような魚が実際に掛かるかは分からない。これが「釣り」におけるもつとも重要な点であると思われる^{viii}。つまり「釣り」という魚一般に向けられた大きな志向性のなかで、明確な対象を指す意図は捨て去られ、待つこと、忍耐すること、そして実際にかかった対象に、糸の振動を頼りに合わせて釣り上げる^{viii}こと、これが「魚釣り」である。たとえハゼが釣れたとしても、その大きさもまた計り知れない。あくまでも実際に掛かったハゼの力や動きに合わせて釣り上げる必要がある。だからこそ、大野は、人間と同じくらいのハゼがかかってきたら動転すると述べているはずである。この「魚釣り」に見出される図式を「舞踏」に当てはめてみるならば、踊る人は、「身体」への志向性を保ちつつ、個々の具体的な動きへの意図や意志を放棄することから始め、それでもなお作動してくる動きを捕まえるということになるだろうか。おそらく大野は舞台の上で毎回、「心」と「身体」の間に張られた緊張関係を感じ、「心」でその都度その都度予測不可能な「身体」の動きを釣り上げ、自ら驚いていたに違いない。

「魚釣り」というこの秀逸な比喻を導き手に、更に「舞踏」における心身の関係について思考を進めてみよう。まず、「魚釣り」において、魚には魚の自律性があり、またそれぞれの魚にはそれぞれの自律性があるがゆえに、それを釣り人の思うまま

に生け捕りにしたり、釣り上げたりすることは不可能である。この比喻に基づくならば、おそらく「心」と「身体」もそのようなのだと大野はイメージしている。自律性をもった「身体」の動きが、舞踏においては「心」と繋がる。その際に、まさに「魂」が「肉体をまとう」という衣の比喻によって述べられているように、「身体」が「心」に合わせるのみならず、「心」もまた「身体」に合わせることになる。いや、釣りの比喻に従うならば、むしろ「身体」が「心」に合わせる、の方が難しいがゆえに、志向性を向けて待つ必要があるのだろう。実際、意識的な意志や意図を中心に人間の行為を理解する場合には、「身体」が「心」に統御されるということは何も珍しいことではないわけであるが、大野が想定しているのはそのような事態ではない。意識的になった途端に、「心」と「身体」の関係は、デカルト的な心身二元論・いわゆる「機械の中の幽霊」という図式に陥ってしまう^{ix}。機械的な「身体」をコントロールするという態度は、もはや「魚釣り」の比喻からはかけ離れたものである。そのように「身体」を制御するのではない仕方では、「身体」を「心」で牽引するには、まず釣り人が魚にするように、「心」が「身体」に合わせる必要があるのだ。当然そのためには、釣り人は魚によくよく付き合ひ、合わせ方を経験的に会得する必要があるだろう。おそらくここにこそ、先に引用した「稽古の必要性」がある。

この「魚釣り」の比喩は、「舞踏」における動きの始まりを考へる上で極めて重要な「タイミング」の問題にも関わっている。第一節で紹介した鯉の比喩にしても、鯉がなぜその瞬間に泳ぎ出すのかを説明するのは極めて困難である。その瞬間の決定には、鯉を取り巻く様々な環境の微細な変化とそれに反応する鯉の身体的リアクションが深く関わっていることだろう。魚釣りにおいて大切なのは、糸を介した間接的接触を頼りに、魚と身体的動きを取り巻く複雑な要素の変化を読み、それらによって構成される決定的な（とはいえ、それは複数の可能性があるだろうが）タイミングを損なわないことであろう。生きている、ある一定の自律性をもつ「身体」に対していかに「心の糸」をたらすのか。あたかもモリで捕まえるかのような明確な意図ではなく、「糸をたらず」という漠然とした志向性を、生きている「身体」に合わせて向けること。大野の探求とはまさにこの点にこそ向けられているのであろうし、多くの人が「舞踏」に求めるものもまたこのような意識的には実現しえない、「魚釣り」のような、「心」と「身体」との関わり方だと言えるのではないか。

4 ケノシス

一九九二年のインタビューにおいて、この「魚釣り」に匹敵

するもう一つの比喩が提示されている。それが馬車を引く馬の比喩である。大野は、身体的に老いることによって、「魂心」が「肉体と身体」を牽引するという事実はいっそう強く実感されるようになり、その実感によって自分はずますます元氣になったと述べている。そして、このような自らの姿を、ドレスデンで見つけた絵本に描かれた老いさばらえた馬に見出したのだという。殊更に興味深いのは、馬が馬車を引いているイラストについての言及であった⁸。大野によれば、「舞踏」とは、馬車、御者、馬の「全てをやること」なのだと言う⁹。この自らによって自らを引っ張るという馬車のモデルは、前述の魚釣りの比喩に符号する。大野は、魚も馬車ともにモティーフとして作品のなかに明示的に登場させてもいるが、それ以外の、たとえば「お膳」のような作品において、胎児が紐で繋がれたお膳を引きずって踊るといふ設定もまた、胎盤と臍の緒と胎児とただけではなく、こうした魚釣りのイメージと重なるように思われる（図1）。

さて、これまで魚や馬といった生き物の比喩によって解析してきた、意識によつては実現されえない「心」が「身体」を牽引するという事態は、キリスト教の根幹をなす実践に触れていると筆者は考へる。それがイエス・キリストの「ケノシス」と呼ばれる実践にはかならない。このイエスの実践は、大野において確認されたような意識や合目的な意志の放棄に明らかに繋がっている。



大野一雄 1992年 池上直哉撮影
〔図1〕

「^{2:1}そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、^{2:2}同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。^{2:3}何事も利己心や虚栄心からするのではなく、

た。このイエスの実践は「自己無化」と訳され、また「自己犠牲」「自己贈与」「利他的行為」などとも言い換えられるが、筆者は、何らかの能動的かつ意識的な意図・意志を前提とするこれらの名称は、イエスの実践にはふさわしくないと考える。また、ここで参照したパウロの書簡『ピリピ書』に見出される、

へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、^{2:4}めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。^{2:5}互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。^{2:6}キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、^{2:7}かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、^{2:8}へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（『ピリピ書』^{2:1-2:8}、訳は新共同訳）

あくまでも個々人の自己保存への意志を前提とした上で他者に対して自己を低めよという命法もまた、「ケノーシス」を極めて意識的な実践として捉えている以上、筆者には好ましいものと思えない。

大野が生き物の比喻を用いて述べた思想は、意識的な意志を前提とせざるを得ない上記の観念的な解説よりも、イエスの他者への関わりの在り様を端的に示しているように筆者には思われる。キリスト教の神学において、「意志」(voluntas, will)という概念は、「愛」を基礎付けるものとして捉えられてきた。

しかし、筆者が福音書を精読する限り、イエスの「ケノーシス」は自己愛や自己保存への意志を別の意志によって克服して、能動的に実践されるものでは決してない。それは、まず第一に、周囲の人間、彼が対峙している人々へのリアクションとして、彼らに合わせて発動されるものである。また、しばしば看過されることであるが、イエスは徹底して身体的行為を通じて人々に関わった人物である。イエスは街々を踏破し、人々に接近して関わりを結んだ。新約聖書学者ゲルト・タイセンによれば、イエスが特定の場所に定住せず常に歩き回っていたことは、彼と弟子たちにかリスマ性を付与する重要な要素であったという。大野は、イスラエルに行つてガザ地区を歩き回っている際に、イエスの「歩み」が自分の「歩み」になったと述べているが、こうした身体性はイエスを理解する上で忘れてはならない重要な点であるように筆者には思われる。

より具体的にイエスの実践を理解するために、大野が稽古中に再現を試みたと述べている有名な場面、『ヨハネ福音書』第八章の姦通した女のエピソードを解説してみたい。

「^{8:1}イエスはオリブ山へ行かれた。^{8:2}朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやつて来たので、座つて教え始められた。^{8:3}そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、^{8:4}イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。^{8:5}こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうか考えになりますか。」^{8:6}イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。^{8:7}しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」^{8:8}そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。^{8:9}これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去つてしまひ、イエスひとり、真ん中にいた女が残つた。^{8:10}イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」^{8:11}女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われ



ピーテル・ブリューゲル『キリストと、姦通した女』(1665)

〔図2〕

イエスのもとに人々が集まり、その人々への反応はリアクションとして、イエスの語りが始まる。さらにその場には、イエスを危険視し、あわよくば彼を告発しようとしているユダヤ教社会のエリートたち、律法学者や祭司たち（「ファリサイ派」）が、ある女性を連れてやって来る。律法学者たちは、イエスを試すために問答を仕掛けるのだが、その問いに対するイエスの反応は瞠目に値する。イエスはかがみこん

た。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」（「ヨハネ福音書」8:1-10 訳は新共同訳）

で指で地面に何かを書いた。この行為については、様々な解釈が可能であるが、筆者は身体的行為とその行為の可能性（「アフォードダンス」）を中心に以下のように解釈してみたい。詰問する人々に対して、イエスは直ちには応えず、自らが立っている地面に触れ、ある意味で地面のアフォードダンスを採掘し、かがみこむという仕方で姿勢を変化させ、書くという身体的な行為を行った。いわばべったり平らになった蝶のように。イエスがなぜこの行為を行ったのかという理由は、とりあえず聖書の記述に即して探すならば、そこに地面があったからと言うほかはない。もちろんそれは、律法学者の目から見れば、ある種のはぐらかしではある。しかし、イエスが実際にはぐらかそうと思ったかどうかは聖書の記述からは分からない。とりあえずイエスは、自らを取り囲む地面に「何かを書ける」というアフォードダンスを発見し、姿勢を変化させ「書く」という行為を行ったのである〔図2〕。それでも律法学者たちにしつこく問いかけられて初めて、イエスは立ち上がって、口を開く。その言表内容もまた、罪という宗教的概念なしに、行為の可能性を中心に言い換えることができる。つまり、イエスは、「女性に石を投げる」という行為の可能性を持ちうる人間は、自らは「石を投げられる」アフォードダンスの可能性を持たないものであると述べたのであった。当然そのような人間はいないし、そういう非対称性は成り立たない。イエスはそう述べた後、なおも地面に触れ続け、その間に彼を糾弾していた人々は立ち去っ

てしまう。そして、取り巻きが誰もいなくなってしまうて初めて、イエスは女性に反応する。あなたには石を投げられる可能性はないのだということを確認して、イエスは女性に「行きなさい」と述べる。

ここには、徹底して自らを取り囲むものの行為可能性に敏感に反応するイエスの姿が記述されているように思われる。自らを取り囲むものに反応することからイエスは始める。この場面においても、イエスは人々を望ましい方向に導きたいという大きな志向性を有していただろうが、個々の行為においては、周囲にあるものにその都度その都度反応しているに過ぎない。このようなイエスのあり方は、確かに前述のパウロ書簡のように「へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え」とも説明できるが、むしろそのような価値判断よりも、環境（人間も事物も含む）の可能性を前提とするエコロジスト的態度として捉える方が適切ではないだろうか。このように考えるならば、イエスが実践した「ケノーシス・無化」とは、自己を周囲の関係によって組成されているに過ぎないものとみなすエコロジストの態度そのもののように思われる。

このような、いわばエコロジスト・イエスの女性に対する関わりは、大野の「魚釣り」の比喻を想起させるものでもある。

イエスが「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」（ルカ5:10）と言つてシモン・ペテロを弟子にしたことは有名であるが、そもそもイエス自身が優れた釣り人だったのではないだろうか。

イエスは、相手に合わせて反応しつつ、いわば相手を釣り上げて、望ましい方向へと放流することに長けていた。先の『ヨハネ福音書』のテキストにおいても、イエスは、大勢の人間のかでもみくちやになつてゐる女性に対して直ちに関わることはせず、地面に触れつつ、しかるべきタイミングを待っていた。そして、全ての人間が去り、環境が整つた時に、イエスは女性に直接声を掛け、おそらくは情動を喚起することによって彼女の心を掴み、そして「行きなさい」と述べて、まさに「心」に牽引される仕方での女性の「身体」を動かそうとしているように思われる。福音書には、こうしたイエスと人々の関わりが豊富に記述されている。例えば、イエスが、急激に接近することによって相手の情動を喚起し、最終的に「行きなさい」と述べてその人物をしかるべき方向へ方向付けるといふ事例は、とりわけ『ルカ福音書』に多く見出される¹¹¹。

このようにイエスが人に関わる際に強いインパクトを与え、そのインパクトが生み出す「心」の動きがその人物の次の行為を牽引するといふこの一連の流れについて、大野は、先の『ヨハネ福音書』第八章を用いながら、以下のように述べている。

「話しはちがうけど昨日、稽古の時に群集が女を打つてゐる有名な話がありますが、その稽古をやつたんですよ。そうしたら何故さういふふうになつたのか。例えば心の中でさうやつてゐる思いで稽古してゐるんですよ。どうして

もつと身体がズーツと出来ないのか。石を投げられたら大変でしょ、投げられている女だって好きで投げられているわけじゃない。するとイエスが出て来た時にフツと、もう語らなくてもいいというふうな思いになってさ、いても立ってもいられなくなってしまう。こういう風になるはずだ。こうならなくても何らかの反応があるはずだ、それは心の中でやつてるって思いだけじゃ駄目だと思うわけですよ。身体がこうならなきゃ。イエスが出て来て娼婦の前に立つと、いたたまれなくなつて、地球のはてまでズーツと行って隠れてしまうような、広さを通り越した中で色々行為が生まれて来るように思えるんです。すると罪のないものが石で打たれるんですよ、これがピンとこたえてね、それだけのことなんだけど、もうそれはイエスの力だね。だけでもこういう中で行われたっていう、こういうような状態、はじめからはじまで突くような、同じような気持ち、それ以上の気持ちで舞台のすみからすみまで動かなくてもいいから、これに比肩するだけの持つてき方がずつとないといけない。そうすると動くということもただやればいいだけじゃない。」(『御殿、空を飛ぶ』五九頁)

大野は、この『ヨハネ福音書』のエピソードの設定を、最初から女性が石を投げられていたと少々誤って記憶しているようだが、この誤解は大した問題ではない。イエスが出て来た時に、

イエスに近づかれた人間の「いたたまれな」という「心」の動きがその人物の「身体」の動きを牽引しただろう、と大野は想像し、そのように「心」が「身体」の動きを生む一連の流れを舞台上で目指していると述べている。イエスの関わりが、関わられた人間の反応を引き起こし、その反応においてその人物の「心」と「身体」の一致が実現するのだとしたら、イエスは、関わった相手を優れた「釣り人」にするのだとも言えるだろう。「心」でもって自らの「身体」を釣り上げ、さらに周囲の人間の「心」を介して彼らの「身体」をも釣り上げる「釣り人」であったイエス。畢竟、大野の舞踏とイエスの実践に共有される人間理解とは「釣り人」というイメージに集約したと言えるだろうか。いやこの言い方はふさわしくない。むしろ、大野に従い、一人の人間は心身のみならずその人物を取り巻くもの全てによつて構成されるとするならば、人間とは「釣り人」であるというよりも、むしろ「魚釣り」という関係そのものだと言うべきであろう。

5 「魚釣りとしての人間」の可能性

本稿では、大野一雄の舞踏とキリスト教を近代批判の文脈に位置づけた上で考察を進めた。その過程で、大野の舞踏に対するアフォードダンス理論の適応可能性を確認し、こうした生感心

理学的観点においてこそ、イエスと大野の実践の共通点が顕著に見出されることもまた確認した。それゆえ大野にキリスト教的な要素を見出すとするならば、福音書に記述されたイエス自身の実践に極めて近い、自らを取り巻くものに繊細に反応するエコロジカルな実践にこそ見出すべきであろう。ギブソンに始まるエコロジカル・アプローチもまた、近代以降の理性中心主義・合理主義偏重の心理学を批判する理論である以上、極めて大雑把な図式においてはロマン主義と方向性を共有している。しかし、ロマン主義が内面性の重視を謡う思潮であることを考えるならば、大野の「舞踏」に見出された、生活者の肉体に根ざしたエコロジカルな可能性が、ロマン主義の範疇を大いに超えて出ているのは間違いない。

「魚釣りとしての人間」というモデルに集約される、大野と福音書のイエスが体現するエコロジカルな人間理解は、デカルトの心身二元論に対する批判性を胚胎している。大野が創始した「舞踏」が未だに多くの人々を惹きつけ、またイエスの教えが、様々な歪曲を経ながらも、長きに渡って強い影響力を広範に及ぼしてきたこと考えるならば、彼らが共有するモデル、すなわち「心」が「身体」を先導する「魚釣り」モデルは、とりわけ生活において実践される・生きられるモデルとして、大きな可能性を潜在させているように思われる。とはいえこの「魚釣り」モデルには、未だ曖昧な点も多い。とりわけ大野が「心＝生命＝魂」と呼称した審級が、意識的な「心 (mind)」とは別の

仕方で、いかにして要請されるのかという問題は、看過できない重要な問いとして残されている^{iv)}。この魅力的な比喻が示すモデルの真価は、今後、生態心理学や認知科学の成果もふまえて検討されることにより、一層明らかになるであろう。これを筆者の課題としたい。

註

i 大野が、シヨパンに代表されるロマン主義音楽を多用することもまた、その傍証のように思われる。エリック・セラント著「本質への回帰」「御殿、空を飛ぶ——大野一雄舞踏のこ」とば「思潮社、一九八九年。

ii 「近世を通じて、科学的『合理』主義に対する自然主義や感性主義や神秘主義からの、総じてロマン主義的な反動と抗議は、くりかえし行われてきた。しかし、これまではそうした反動や抗議も、自然についての科学的な知見に関するかぎり、それに共鳴できるかどうかは別として、『デカルト的・ニュートンのパラダイム』による知見が唯一正しいものとして承認せざるをえなかった。人間にとって科学だけが、あるいは科学的な自然観だけが、すべてではないというのが、その精一杯の抗議だったといえる。」藤沢令夫著「世界観と哲学の基本問題」『藤沢令夫著作集 第三卷』岩波書店、二〇〇〇年、二二一—二二二頁。

- iii DVD『美と力』NHKソフトウェア収録、一九八五年のインタビュー。
- iv 『御殿、空を飛ぶ』一一六頁
- v 小池琢也著「物と人の境界―舞踊の表象機能の探求」『アート／表現する身体』佐々木正人編、東京大学出版会、二〇〇六年。
- vi 独立した精神的実体というデカルトが述べたままの形ではないが、デカルトが示した情報が入り出す中枢としての「心」というモデルは、現代の認知科学や心理学、そして私たちの日常的理解に明らかに継承されている。村田純一著「心身問題」『哲学の木』永井均ほか編、講談社、二〇〇二年、五六―五六八頁。
- vii 昨今「生命」が哲学の中心的主題の一つになり、近代的人間観に修正を迫る急先鋒であるのは間違いがない。大野の「生命」理解は、そうした観点からも興味深い。
- viii 佐々木正人氏によれば、あらゆる運動はこのような決定性と非決定性を併せ持っている。行為は大きな目的性を持っているが、その行為を構成する一つ一つの運動は、対象物との関係において一つ一つ決定されていくものではない。この問題については以下の著作を参照のこと。佐々木正人著『ダーウィンの方法―運動からアフォーダンスへ』岩波書店、二〇〇五年。
- ix ギルバート・ライルがデカルトの心身二元論を評して述べた言葉である。ギルバート・ライル著、服部裕幸ほか訳「心の概念」みすず書房、一九八七年。
- x 『御殿、空を飛ぶ』一一〇三頁。
- xi シンポジウムの当日、大野の弟子であった笠井叡氏の講演では、大野がオディオン・ルドンの作品「アポロンの馬車」を好み、しばしばそれを舞踏の比喩に用いていたと語られていた。このルドンの作品もまた、馬車の比喩の典拠の一つと思われる。
- xii ゲルト・タイセン著、荒井献訳「イエス運動の社会学・原始キリスト教成立史」によせて「ヨルダン社、一九九一年。
- xiii 拙稿「イエスの〈接近Ⅱデイスボジション〉——近づくという行為・行為の伝達」『デイスボジションⅡ配置としての世界』現代企画室、二〇〇八年四月出版予定。
- xiv 現代では、デカルトの心身二元論に連続する、脳を中枢とする人間理解や意識的な意志に基づく自己責任型の人間理解が支配的である。多くの場合、芸術や宗教は、こうした理性主義の反動としてロマンティックなオルタナティブを提示する立場に甘んじてきた。「魚釣りとしての人間」をロマン主義的な極端に帰すことなく、その批判性の真価を示すためには、「生命の根源」と呼称されていた「心Ⅱ魂」等の主要概念については、現代の認知科学等の成果もふまえてつづ捉えなおしていく必要があるだろう。人間の意識や無意識の多くが脳という器官に還元可能であることが明らかになった今日でも、「心Ⅱ魂Ⅱ生命」と呼称せざるをえない位相が、生活や舞踏や人々との関わりなどの実践的場面においては明らかに存在することを、より説得的に説明する必要がある。生命の原理として「魂 (soul)」が意識的「心 (mind)」に取って代わった経

緯については、以下の書籍が詳しい。エドワード・リード著、村田純一ほか訳『魂から心へ——心理学の誕生』青土社、二〇〇〇年。こうした歴史的経緯を鑑みた際に、私たちが留意すべきなのは、大野が述べるような「心」が過去の遺物への退行であるかのような誤解を生まないような、有効な解説方法を編み出すことである。